

# 茫々はるか

(大正十三年寮歌)

高野芳雄君 作歌  
神島辰雄君 作曲

## 一

茫々はるかに緑に炎えて  
石狩原頭美の香に酔えば  
高鳴りあふるる若人の血や  
ああこの霊の憧れの地に  
曙光に輝く黎明告ぐる  
鐘を撞かばや

## 二

真紅に熱せる入陽は沈み  
黙思の歩みを運ぶ夕宵は  
エルムの繁みの梢透かして  
夕映流るる黄色の彩に  
生命の窓をば疾く開け放ち  
霊気吸はずや

## 三

地平の際涯によしや吾等の  
感激は沈めど彼方はるかに  
思索の曠野は尽せぬなれば  
石狩河岸に友よ佇み  
野生の律べの秘奥を求め  
真理を聴かん

## 四

寒風荒びて吹雪吹く夜も  
榆林に洩れたる四寮の燭光  
生命ぞまたたき青春の日の  
灯累りて永遠に輝く  
ああ其の灯かげに霊と血潮の  
籠められしかな

## 五

昔を偲べば吾等が寮は  
原始の茂森に生める自然児  
不断の船路に彼岸めがけて  
自治への歩みは十九星霜  
自由の栄に友よ奏でん  
平和の序曲